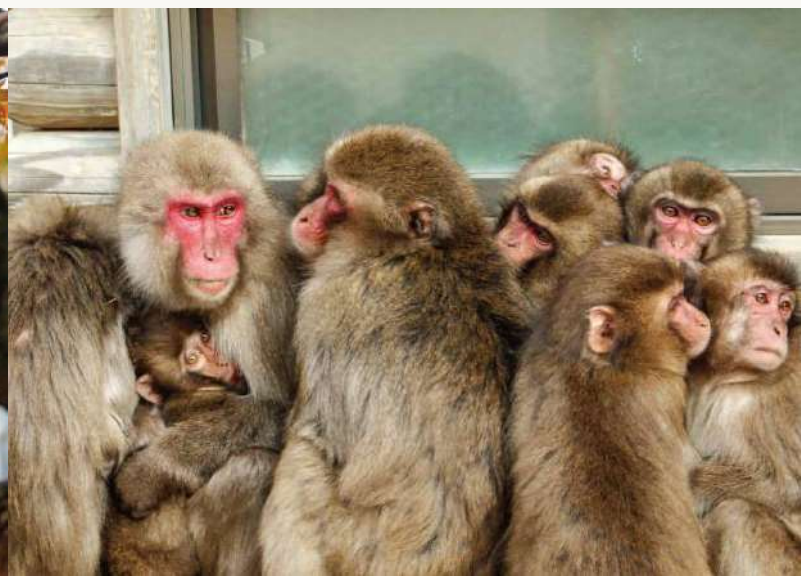
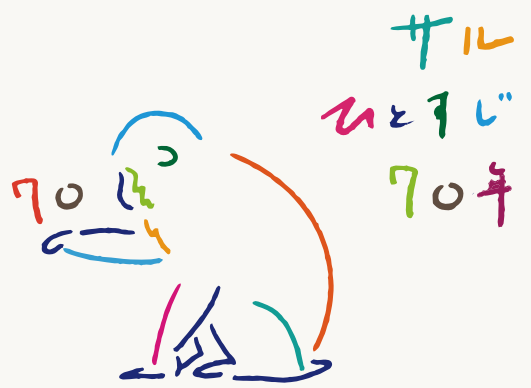




高崎山 自然動物園 のあゆみ

国立公園高崎山自然動物園
開園70周年記念誌



開園70周年を 迎えるにあたって



高崎山自然動物園は昭和28年3月に日本初の野猿公園として開園し、おかげさまで本年の3月15日をもって70年の節目を迎えます。これもひとえに皆様方のご支援、ご協力の賜物であり、心から感謝申し上げます。

当園は、国内はもとより海外からも多くの観光客が訪れる本市を代表する観光施設として、また、霊長類研究の分野での学術的な貢献や、自然と野生動物の生態を学ぶことができる自然教育の場として大きな役割を果たしてまいりました。

一方で、令和2年以降の新型コロナウイルス感染症の世界的な流行の影響を受け、海外からの入国制限措置や、旅行控え、外出自粛の影響等により国内外の観光需要が大きく減少し、当園もその影響を受けました。

このような中、令和4年3月に策定した「第2次大分市観光戦略プラン」では、高崎山自然動物園や高崎山おさる館をはじめ、高崎山全体の活用による魅力向上を図るとともに、国内外に向けたサルの魅力の積極的な情報発信、大分マリンパレス水族館「うみたまご」や令和6年オープン予定の大分市西部海岸地区憩い・交流拠点施設「たのうらら」など西部海岸地区の各施設と連携したイベント開催などにより、高崎山エリアへの誘客と、同エリアから市内中心部や市域全体の周遊につなげていく取組を推進し、高崎山を中心とした賑わいの創出に力を注いでいくこととしています。

また、令和4年4月には持続可能な運営体制を構築するため、園の運営を市の直営にしたところであり、これまで以上に皆さまから親しまれる高崎山自然動物園を目指してまいりますので、これまでと変わらぬ格別のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年3月1日
大分市長 佐藤樹一郎

目次

「開園70周年を迎えるにあたって」	
主な出来事【2018(平成30)年～】	3
近年話題になったサルたち	
「高崎山史上最恐女子」 B群 ヤケイ	4
「奇跡の母ザル」 B群 マツバ	7
歴代のボスザル・ α オス・第1位	10
第1号赤ちゃんザルの名前と由来	27
TNZ選抜総選挙	28
開園70周年記念事業	32

〈資料編〉	
餌付け当初からの個体数	36
主な事業・実績・出来事	37
主な取材	40
講演、出前授業、体験学習、職場体験	45
年度別高崎山自然動物園入園者数	56
年度別高崎山自然動物園駐車場利用台数	58
年度別さるっこレール利用者数	59



主な出来事【2018(平成30)年～】

2018(平成30)年

- 1月 高崎山おさる館2階
「おさるの資料室」
リニューアルオープン



2019(令和元)年

- 1月 さるっこレールリニューアル



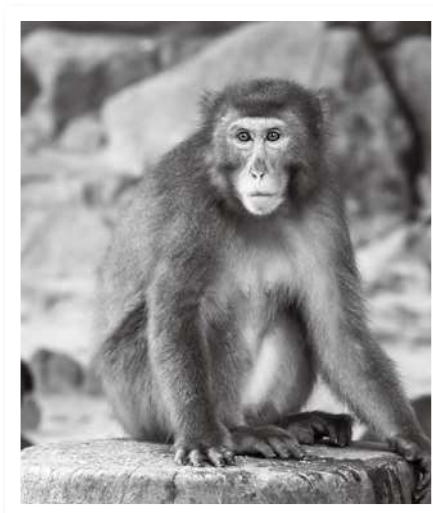
- 2月 高崎山入園口に
「グッズ販売コーナー」を新設

2020(令和2)年

- 3月～5月 新型コロナウイルス感染拡大のため
休園(3月22日～5月31日)

2021(令和3)年

- 7月 B群第18代第1位に
「ヤケイ」が就任
高崎山史上初メスザルが第1位に
これに伴い名称αオスを
第1位へ変更



2022(令和4)年

- 4月 高崎山自然動物園が
大分市の直営となる
3月31日までの存続期間をもって、
一般財団法人大分市高崎山
管理公社解散
- 11月 さるっこレールの車掌として
活躍していた子ザルの
キャラクター名が
「ななまる」に決定



高崎山史上 最恐女子



B群第18代 第1位 ヤケイ

2021（令和3）年7月30日、高崎山史上はじめての出来事が起きました。B群の第1位にメスザルが就任したのです。彼女の名前は「ヤケイ」といい、その家系は、祖母の「オレケイ」の頃から、代々B群のメスザルの中で第1位の座にありました。ヤケイの母親である「ビケイ」は気性が荒く、ヤケイの祖母である「オレケイ」を力で倒し、メスザル第1位の座を奪ったサルでした。

そんな母親ビケイの元で育ったヤケイですが、2020（令和2）年以前の行動については特に目立ったものはなく、「ごく普通のメスザル」という印象でした。

ヤケイが注目され始めたのは2021（令和3）年の2月頃からです。この時季は高崎山のサルたちは発情期にあり、当時B群第2位だった「マクレーン」はヤケイに夢中になっていました。ヤケイがどこに行くにも常に一緒に、ヤケイは自分に夢中になっているマクレーン

を利用したのでしょうか。それまではB群のメスザル第1位だった母親のビケイには遠慮がちでしたが、3月に入った頃からヤケイ自らビケイの方へ近づくなど、威圧をするかのように接しはじめました。

そして2021（令和3）年3月15日、ついにヤケイはサル寄せ場の中で母親のビケイと衝突したのです。それまでは母親として、またB群のメスザル第1位としての威厳を保ってきたビケイですが、マクレーンを背景にして急速に力をつけてきたヤケイとは、母娘とはいえども、権力争いを避けることができなかったのでしょうか。ついに2頭は咬みつくなどの荒々しい戦いになりました。序盤こそお互いに譲らず取っ組み合いの状態でしたが、次第にビケイが劣勢になり、ついにヤケイに背を向けて逃げるような格好になりました。ヤケイはその機を逃すことなく追撃してビケイの尻尾に咬みつくとビケイはたまたま鳴き声を上げ、その一撃を最後にビケイはヤケイから逃げるようになってしまいました。ビケイとしては皮肉なもので、母親から腕力で奪い取った権力の座を、今度は自分が我が娘から同じように腕力で奪われることになったのです。

この戦いを境にB群メスザル第1位となったヤケイでしたが、その座でとどまることを良しとしませんでした。今度はオスザル社会へも積極的に介入し、自らの腕力を持ってオスザルを倒すことによって自分の地位を確立しようとし始めました。観察する限りは「オスザルにあえて戦いを挑み、腕力で勝利する。」という単純な方法で、順位の低いオスザルたちは相手にせず、第4位以上の高順位のオスザルに立ち向かっていきました。そうして、ヤケイはオスザルを相手に1対1で対決し勝利し



ていくという図式を作り上げ、上位のオスザルたちを1頭1頭倒していきました。

しかし、ヤケイもそう簡単にオスザルたちを退けることはできませんでした。特に当時B群第3位だった「ゴエモン」はヤケイに対し執拗に抵抗を続けました。ゴエモンに勝負を挑みはじめた当初は、腕力的にはほぼ互角かあるいはゴエモンの方が優勢でしたがヤケイはその後、何度も挑戦し真向勝負では敵わないと見るや、今度はゴエモンの背後から襲いかかるようになりました。幾度となく背後からヤケイに突然襲われるようになったゴエモンは、さすがにヤケイを見ると逃げるようになりました。この頃には、以前ヤケイに夢中になっていたマクレーンでさえ、ヤケイが近づくと怯えて逃げ出すようになっていました。





そうして2021（令和3）年5月上旬には、当時B群第1位の「ナンチュウ」に次ぐ地位を得るに至りました。高崎山の歴史の中で、メスザルが第1位のオスザルに次ぐ力を持つことはあったのですが、これまでのメスザルたちは群れの第1位と仲良くなり、その関係を背景に他のサルに対してイニシアチブを取るといった第1位のオスザルへの依存で成り立つ関係であったのに対し、ヤケイの場合は、第1位のオスザルに依存していないことが、これまでのメスザルたちとの大きな違いでした。その違いは第1位であるナンチュウの地位を脅かす可能性がある私たちにも容易に想像することができました。

そして、実際に地位が逆転する出来事が2021（令和3）年6月25日に起きました。B群が小麦の餌を食べている時間に、ナンチュウはサル寄せ場内の切り株の上で小麦を拾っていました。そのすぐそばでヤケイも小麦を拾っていました。その時、近くの子ザルがヤケイの間近にある小麦の餌を拾ったのです。ヤケイはこれに激怒し、その子ザルに咬みつきました。それを見ていたナンチュウはすぐさま切り株から降り、ヤケイに向かっていきました。2頭は最初こそお互いを両手で叩き合う程度の軽いものでしたが、突如ヤケイがナンチュウの肩口に咬みつきました。ナンチュウも負けずにヤケイに咬みつこうとしますが、なかなかヤケイに咬みつくことができません。そのうちナンチュウは劣勢になり、鳴き声を発



してヤケイから逃げるように遠ざかりました。わずか数分間で決着はつきました。それ以降ナンチュウはヤケイが近くに来ると逃げるようになりました。

その後もヤケイとナンチュウの関係はかわらず、2021（令和3）年7月30日に高崎山で初めてヤケイがメスザルにして群れの第1位となったのです。



奇跡の母ザル

02



B群 マツバ

B群の「マツバ」という名前のメスザルが、2021（令和3）年に話題となりました。マツバは2022（令和4）年9月現在20才で、人間の年齢では60代前半にあたります。これまで5頭の子どもを出産し育ててきた子育てのベテランです。

マツバは、2021（令和3）年5月31日にオスザルを出産しました。話題のきっかけとなったのは6月29日の出来事です。現在、高崎山では午後4時40分に

B群へサツマイモをリヤカーで与えています。サルはこの餌が終了すると各々山へ引き上げていきます。その際、おさるの保育園に赤ちゃんザルを預けている母ザルは迎えに行き、一緒に山へ連れて帰るのです。万が一、母ザルが迎えに来ない時は、職員がわざと赤ちゃんザルに近づき鳴き声を上げさせ、母ザルが気付いて迎えに来るように促してあげます。生後間もない赤ちゃんザルが1頭で残ったままだと母乳も貰えず、最悪の場合が

想定されるからです。しかしこの日は、「おさるの保育園」に1頭の赤ちゃんザルが取り残され、サルたちが山へ帰る午後5時頃になっても母ザルは迎えに来ていませんでした。この時、私たち職員は遠くから様子を見ていましたが、母ザルが迎えに来る様子もない事から、赤ちゃんザルの方へ職員が近づいてみました。しかし、近づいても赤ちゃんザルは鳴き声を上げることがしませんでした。結局母ザルらしき姿は一向に現れず、その赤ちゃんザルは自力で石垣を登り山へ姿を消したのです。そんな赤ちゃんザルを心配して近くで見ているマツバを職員は目にしていました。その時は、マツバが抱いてくれたらとの思いが胸をよぎりましたが、マツバの胸元には既に1頭の赤ちゃんザルがいるため、2頭を世話する事は無理ではないかと諦めていました。

そして翌日B群が山から下りてくる時間となり、私たちは前日の赤ちゃんザルの安否が心配で見っていたところ、山から下りてくるサルの中に、2頭の赤ちゃんザルを抱いたマツバを見つけたのです。恐らくマツバは、前日の夕方自力で石垣を上った赤ちゃんザルを放っておけずに、我が子と共に抱いて山へ帰り一晩を過ごしてくれたのでしょう。



マツバのこの行動は、ニホンザルの中でも、高崎山の70年の歴史の中でも珍しいことなのです。ニホンザルは、自分の子どもにしか関心を持たないことが多く、たとえ自分のそばで他のサルの赤ちゃんザルや子ザルが鳴き声を上げていても面倒を見ることはありません。また、基本的に一産一児で2頭を生み育てることはないのです。実際、高崎山でも双子が誕生したことはありますが、非常に稀で、開園以来9例しかありません。さらに2頭とも無事に成長したのは3例しかないほど、メスザルが2頭の赤ちゃんザルを同時に育てることは非常に困難なことなのです。

この日を境に、マツバは2頭の赤ちゃんザルの子育てを始めました。マツバは、時には背中と胸元に1頭ずつしがみつかせたり、時には2頭とも背中にしがみつかせたり、胸元に2頭ともしがみつかせたりと、2頭同時に抱えて歩く極意を見せてくれました。更にマツバの様子を見て感心させられたのは、赤ちゃんザル2頭を背中に乗せて移動する際に、しがみついている赤ちゃんザルが落ちないように尻尾を「ピーン」と立てて常に守ってあげている母ザルの姿でした。

当初は2頭を育てていくうえで母乳が足りるのか心配をしていましたが、いらぬ心配だったようです。どちらの赤ちゃんザルにも分け隔てなく母乳を与え、赤ちゃんたちは元気に育っていきました。

母乳だけで過ごしていた赤ちゃんザルたちも、次第に30分ごとに園内で撒かれる小麦の餌を拾い始めるようになり、その成長とともに各々個性が出てきました。1頭はマツバから片時も離れることをせず、もう1頭はチョロチョロと動き回るようになったのです。そんな時もマツバは動き回る赤ちゃんザルの付近に必ずいて優しく見守っていました。階段等の危険場所では先回りをして様子を見たり、落ちないように下から見守ったり常に気配りを欠かすことはありませんでした。

季節は秋を向かえ、赤ちゃんザルたちは更に活発に動き回るようになり、これまで以上にお世話が大変になってきましたが、実はそんな時マツバには力強い味方がいたのです。その味方とは、これまでマツバが産み育ててきた子どもたちです。お姉さんザル、お兄さんザルはマツバと同様に2頭を分け隔てなく毛づくろいをしてあげたり、遊んだりとお世話をしていたのです。

そして2頭の赤ちゃんザルにとって初めての冬。この年に誕生した赤ちゃんザルにとっても試練の時期になります。高崎山は比較的温暖な気候ではあるものの、それでも冬の寒さは厳しく、乗り越えることのできない赤ちゃんザルがいるのです。特にこの年は、高崎山にしては珍しく雪が積もるほどの寒さでしたが、マツバは寒さに震える2頭の赤ちゃんザルを胸にしっかりと抱きしめ、無事に冬を越すことができたのです。

2023（令和5）年1月現在、2頭の赤ちゃんザルたちは1才を迎え、2度目の冬を過ごしています。この2頭はオスザルです。オスザルは近親交配を避けるために概ね3才から4才で親元を離れ独り立ちをしてしまいます。いずれマツバの元を離れる日が来るでしょう。マツバが繋いだ小さな命。マツバがいなければ、消えていたであろう小さな灯が消えずに残りました。優しいマツバの行動は、今後も語り継ぐべき高崎山の歴史の1つとなりました。



歴代のボスザル・αオス・第1位

A群



初代

ジュピター

1952(昭和27)年11月～
1961(昭和36)年1月

サル寄せを開始した当時、すでにボスとして君臨していました。「彼がいなかったら現在の高崎山の繁栄は考えられなかった。」と言われるほどのボスです。

戒名 帰真寿山狒統禅猿位



2代

タイタン

1961(昭和36)年1月～
1964(昭和39)年6月

慈愛に満ちた寛大さで群れを治めました。黒味がかった毛、白い尻尾は見事がかっこ良く、メスザルには圧倒的な人気がありました。



3代

バッカス

1964(昭和39)年6月～
1967(昭和42)年6月

高崎山の最長老(当時)であり、いつも酒を飲んでいるような赤ら顔で、全身白毛でおおわれ観光客の人気の的でした。

A
群4代
ブア

1967(昭和42)年6月～
1967(昭和42)年8月

体格が小さくて気性は荒く、妥協することを知らず、統率力に欠けた面がありました。

5代
ダンディー

1967(昭和42)年8月～
1970(昭和45)年1月

開園当時からボス見習いをやってきて、ようやくボスの座を得ました。温厚な性格で足が長く、均整のとれた容姿はミスター高崎山としてメスザルに圧倒的人気がありました。

6代
トク

1970(昭和45)年1月～
1973(昭和48)年1月

先代ボス「ダンディー」の離脱と同時に最年少(当時)のボスになりました。仲間からあまり好感を持たれていないボスでした。

A群



7代 ケム

1973(昭和48)年1月～
1973(昭和48)年3月

責任感が強く、人間に対して攻撃的で荒々しいボスでした。ボス就任後、2か月足らずで姿を消しました。



8代 ジュチ

1973(昭和48)年3月～
1980(昭和55)年3月

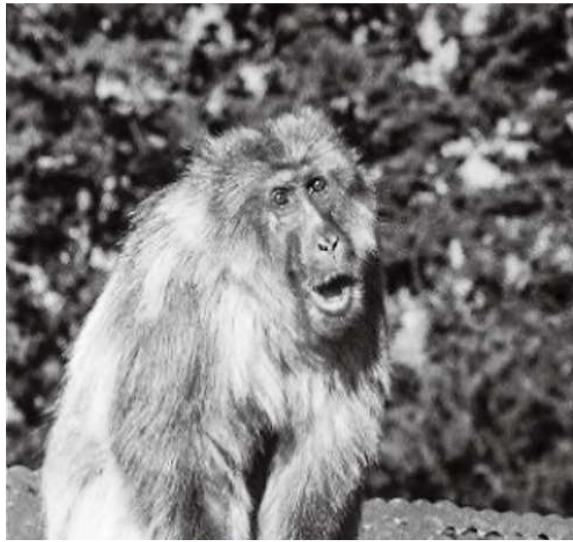
気性が荒く仲間からの人気はあまりありませんでしたが、ボス就任後はその責任をよく果たし、長期にわたってボスの座に君臨しました。



9代 ヘクター

1980(昭和55)年3月～
1981(昭和56)年12月

下積み生活が長く、22才でボスの座に就きました。性格はおとなしく、人間に対して比較的慣れたボスでした。C群を偵察中に列車にはねられ命を落としました。

A
群10代
トボ

1981(昭和56)年12月～
1986(昭和61)年6月

群れの中で際立った白毛サルでした。体格こそ恵まれていませんでしたが、群れに対する貢献度は高く、メスザル、子ザルたちからの信頼も厚く、側近ザルも多かったです。

11代
ギャラン

1986(昭和61)年6月～
1988(昭和63)年7月

性格は温厚で優しく、彼のまわりにはいつもたくさんのメスや子ザルたちがいました。しかし、いざとなったら闘争力に欠け頼りない一面もありました。

12代
ホープ

1988(昭和63)年7月～
1992(平成4)年12月

先代ボス「ギャラン」の補佐としての任務を果たし、仲間同士のトラブルの仲裁や、群れの間の争いにはいつも先頭に出ていました。体格に恵まれ、仲間思いの行動は立派であり、人間に対して厳しいのも彼の魅力でした。

A群



13代 テツ

1992(平成4)年12月～
1996(平成8)年9月

母ザルのもとで少年・青年期を過ごし、先代「ホープ」の降格によりボスになったサルで、群れを守る意識や野性味はあまり感じられませんでした。



14代 チューテツ

1996(平成8)年9月～
1997(平成9)年8月

先代ボス「テツ」の弟ですが、兄とは性格が正反対で非常に攻撃性の強いサルでした。しかし、C群に対して先制攻撃をするものの、争いが大きくなるといつもいつの間にかいなくなり、部下まかせにしていました。



15代 コーテツ

1997(平成9)年8月～
1999(平成11)年2月

テツ、チューテツの弟で「クズテツ」という名でしたが、平成9年4月に改名しました。非常に気が小さく温厚なタイプで、群れを守る意識があまりありませんでした。顔つきはキリっとしていて美形ザルとして有名でした。